

十八世紀中期から二〇世紀初頭の陸奥国会津郡金井沢村 における稲の作況記録 中

―室井家文書「作毛位付帳」（享和元年から天保十一年まで）―

川 口 洋

はじめに

本稿では、前稿に続き、陸奥国会津郡金井沢村（現、福島県南会津郡南会津町金井沢）の名主・室井家が保存してきた「作毛位付帳」（南会津町立奥会津博物館架蔵、室井家文書、四一九六）のうち、享和元（一八〇二）年から天保十一（一八四〇）年に至る四〇年分を翻刻・紹介する。「作毛位付帳」には、宝暦九（一七五九）年から大正五（一九一六）年に至る一五八年のうち、一一八年間の金井沢村における稲の作況が記録されている（川口、二〇二一A）。

稲の作況は、貢租、米価、主穀の生産・流通・消費な

どを介して人口支持力に大きな影響を与えるため、人口変動の要因を検討するうえで重要な要素となる。稲の作況と寺院「過去帳」や「宗門改人別家別改帳」などから復原できる死亡指標を比較することにより、江戸時代後半の北関東以北における人口減少の主要因と考えられてきた冷害に伴う凶作と死亡危機との関係に接近する可能性を拓くことができる（川口、二〇二一B）。

管見の限り、本史料は一カ村で栽培された稲の作況を十八世紀中期から一世紀以上に亘って記録した会津地方唯一の史料である。会津地方周辺の作況記録としては、陸奥国信夫郡小倉寺村の「村内年々前見記帳」、越後国魚沼郡芋川村屋家の「大福種子帳」と「大福稲苅帳」、

および下野国那須郡河原村関谷家の「籾取高覚帳」が知られている（福島県、一九六五・八七四・八八二頁。アチック・ミューゼウム、一九三九。岸、一九四七）。このうち星・関谷両家の史料は、稲の作況を長期間に亘って復原できる点で貴重であるが、個別農家の事情を強く反映している可能性を否定することはできない（鬼頭、二〇〇六・一二四頁）。本稿では、実施主体が村落である点など共通点の多い中部地方における坪刈帳を分析した佐藤常雄の大著に学び、「作毛位付帳」の内容を紹介したい（佐藤、一九八七）。

金井沢村が所属する南山御蔵入領は、陸奥国会津郡、大沼郡、下野国塩谷郡の一部を含む十九組二七一カ村から構成されている。八力村で構成される高野組こうやに所属する金井沢村は、村高三五四石余、田二五町余、畑十二町余、人口約三五〇人、阿賀川上流の檜沢川ひさわがわ左岸に立地する集落の標高は約五八〇mである。南山御蔵入領は、会津藩預り支配と幕府直支配の時代を交代しながら、幕末期に会津藩に組み込まれた（奥会津博物館、二〇一八・十一・十四頁）。

本稿では、史料の概要、一步の面積、籾の重量、稲の品種、内歩刈の行われた時期、内歩刈の対象となった水田、稲の作況、「作毛位付帳」と「歩刈帳」の差異、および畑作物の作況について検討したのち、稲の作況が十九世紀前半に最低を記録した天保四（一八三三）年の天候推移を追跡したい。南山御蔵入領は、この四〇年間のうち天保八（一八三七）年まで会津藩預り支配、天保八年から幕府直支配となった。本稿では、新暦に換算した月日を算用数字、それ以外を漢数字で示す。室井家文書の史料は、初出時に奥会津博物館が付した資料番号を示す（南会津町教育委員会、二〇一〇）。

一 史料の概要

本稿で翻刻、紹介する「作毛位付帳」の享和元年（一八〇一）年から天保十一（一八四〇）年に至る四〇年間のうち、享和二年、文化四・七年の作況記録には、年月日に続いて「歩刈（茹）」、右の三年間と文政二・三年、天保二・三・一〇・十一年を除く三一年間の史料には、年月日に続いて「内歩刈（茹）」と書かれている。

南山御蔵入領では、享保十三（一七二八）年から作況に関わらず年貢率を三年から一〇年間一定とする定免制に移行した（三島町史編纂委員会、一九六八・一一八・一五二頁、伊南村史編さん室、二〇一一・四七〇・四七七頁）。凶作となった場合、村は検見を願い出て、見分役人の立会いの下で検見歩刈を行い、破免を求めることができた。凶作に備えて、村が独自に一步の水田数カ所から刈り取った稲の収量を計測する内歩刈を行い、その結果を記録したのが本史料とみられる。

「作毛位付帳」に記録されている天保八（一八三七）年の作況につきに示す。

【史料一】「作毛位付帳」（室井家文書、四一九六）より
天保八年の記録を抜粋

天保八酉	八月廿四日	彼岸中日	また下	中田
内歩刈	上組	太右衛門所	一、万石	壺升
柿下	上田		九十三	壺升
一、白子		壺升五夕	檀ノ下	下田
百拾株	壺升	三百貳拾匁	一、江戸	八合五夕
			七十八	皆匁
			上田	壺升五夕
			反取	三石壺斗五升
			此米	壺石五斗七升五合
			中田	壺升
			反取	三石
			此米	壺石五斗
			下田	八合五夕
			反取	貳石五斗五升
			此米	壺石貳斗七升五合
			平均	壺石四斗五升』

宗兵衛

忠右衛門

史料一には、内歩刈を行った年月日、脱穀や計量の場所を提供したとみられる家、小地名、水田の等級、稲の品種、籾の容積、田主（地主）、稲の株数、一升当たりの重量が、上中下田の三カ所で記録されている。さらに、一歩から収穫された籾の容積にもとづいて、反取（籾の反当収量）、此米（米の反当収量）、および上中下田における米の反当収量の算術平均が試算されている。

史料一では、一歩から収穫された籾の容積の三〇〇倍が反取となっているため、一反が三〇〇歩であることが確認できる。籾の反当収量の半分が米の反当収量となっており、五分摺りで籾の容積が米の容積に換算されている。

明治四（一七六七）年の作況記録の後には、「下組 甚兵衛所^二もみ候」と書かれている。刈り取った稲穂から籾を脱穀して、容積と重量を計量する作業が、甚兵衛家で行われたと考えたい。内歩刈を行った年月日に続いて、「上組 太右衛門所」（史料一）、「宿 下組 清吉」（天保七年）、「宿 新右衛門所」（文政三年）などと記されているのは、脱穀や計量の場所を内歩刈のために提供し

た「宿」と呼ばれる家とみられる。

内歩刈の対象となった上中下田における米の平均反当収量…一石四斗五升到水田面積…二五町を乗じると、金井沢村における米の推定総収量は三六二石五斗となる。十二町余の畑で栽培された作物を加えると、不作であった天保八（一八三七）年でさえ、金井沢村の実収量は、村高三五四石を大きく上回ったとみられる。

二 一歩の面積

明治九（一八七六）年の作況記録の末尾には、「上中式鎌旧竿^二刈取、改正新竿六尺壹間^二いたし彦平田壹鎌刈取候」と記されている。彦平の水田一歩を計測した「改正新竿」とは、明治八（一八七五）年8月5日に公布された太政官第一三五号達の度量衡取締条例にもとづく折衷尺（一尺 \parallel 約三〇・三〇三cm）の六尺を一間とする間竿を示すとみられる。明治九年まで金井沢村で歩刈の対象となる水田一歩を計測してきた「旧竿」は、一間 \parallel 約一・八一八mの「新竿」ではなかった。

糠澤章雄によれば、天正十八年八月七日（一五九〇年

9月5日)に長沼城から豊臣秀吉が、南奥州で最初に発した検地に関する朱印状には、一反を五間六〇間の三〇〇歩として、京枘で斗代を定めており、金井沢村周辺を対象とした「天正十八年八月 田嶋郷御検地帳」も、秀吉指揮による会津検地の一環と位置付けられている(糠澤、一九九七・一・二頁)。検地で使用された間竿の長さは不明であるが、奥州各地で異なっていたとみられる(安田、一九八六・三一頁。糠澤、一九九七・五頁)。そこで、会津地方で耕地の面積を計測した一間の長さに関する史料を次にあげる。

【史料二A】「會津古今貢納式 全」(会津図書館所蔵、請求番号・十一・ロ・五三) 傍線筆者

會津古代草高發貢納之式

天正年中以前、芦名家譜之治世ニテ村方ヲ分、地頭附ニテ、地形ヲ以、全領地令知行、千石ヲ永樂錢百貫文ニ定、其地頭ニテ致貢納、其時代ヨリ地之方寸、六尺三寸ヲ壹間ト云。此四方ヲ壹歩トシテ、三十歩ヲ壹畝ト云。三百歩ヲ壹反ト定ム。永樂錢之方法如

左。

【史料二B】「會津古代草高發貢納之式 全」(会津図書館所蔵、請求番号・十一・ロ・七五) 傍線筆者

會津古代草高發貢納之式

天正年中以前、芦名家譜之治世ニハ村形ヲ分チ、地頭附ニ而、地形ヲ以テ、全領地令知行、千石ヲ永樂錢百貫文ニ定、其地頭ヘ致貢納、其時代ヨリ地之方寸尺、六尺三寸ヲ壹間ト云。此四方ヲ壹歩トシテ、三十拾歩ヲ壹畝ト云。三百歩壹反ト定。永樂錢之方左之コトシ。

【史料二C】「出羽奥 會津物成」(会津図書館所蔵、請求番号・八・二・五〇) 傍線筆者

會津古代草高發貢納之式

天正年中以前、芦名家譜之治世ニテ村方を分ケ、地頭附ニ而、地形を以テ、全領地令知行、千石を永樂錢百貫文ニ定、其地頭ニテ致貢納、其時代方地之方寸、六尺三寸壹間と云。此四方を壹歩とし、三十歩

を壹畝といふ。三百歩を壹反と定。永樂之法左之ことし。

史料二A「會津古今貢納式 全」と史料二B「會津古
代草高發貢納之式 全」には、「若松市史編纂事務所之印」
という角印が押印されている。両史料は、昭和十六
(一九四一)年に刊行された『若松市史』編纂のために、
市史編纂事務所が収集した原史料を書写した写本と推測
される。明治四三(一九一〇)年から始まった若松市史
編纂は、当初、初代会津圖書館長・小川謙三が常任委員
として所管した(若松市役所、一九四一…編纂顛末)。
写本の原史料の来歴は、会津圖書館に保存されている開
館以来の「旧分類圖書台帳 第十一門」、「旧分類圖書台
帳」から郷土資料を抜き出した「會津圖書館郷土資料分
類目録」、および『若松市史 上』にも記録されていない。
両史料の表紙は同筆であるが、二丁目以降は異筆であり、
表記が異なる部分も散見されるため、同じ原史料を別人
が筆写したとみられる。

一方、史料二C「出羽奥 會津物成」には、「若松市
立會津圖書館藏書印」という角印が押印されており、「大

正六年五月飯岡七郎氏寄贈」と書かれている。飯岡家は
若松の検断職を務めていた。史料の来歴は、「旧分類圖
書台帳 第八門」と「會津圖書館郷土資料分類目録」に
も記録されていない。本史料が翻刻されている『會津若
松史 第9巻 史料編Ⅱ』には、「『會津物成』は、成立
年代、編さん者、編さんの由来など不明である」と書か
れている(會津若松史出版委員会、一九六七・三三〇頁)。

史料二A・B・Cによれば、天正年間以前に荻名家が
會津地方を治めていた時代から、一間を六尺三寸、一間
四方を一步、三〇歩を一畝、三〇〇歩を一反としていた。
明治九(一八七六)年まで、内歩刈の対象となる水田の
面積を測っていた旧竿の一間を六尺三寸¹約一・九〇九
mと仮定すると、一步の面積は約三・六四五²mとなる。
一方、折衷尺六尺を一間とする新竿で計測した一步の面
積は約三・三〇六³mである。旧竿で計測した一步の面積
は、新竿で計測した面積より〇・三三九⁴m、一割以上も
広がった可能性がある¹⁾。

三 粃の重量

本史料には、一步の水田から收穫された粃の総重量が享和元（一八〇一）年から、一升当たりの重量が享和二年から記録されている。享和元年と文化五年、および文化三年・文政八年・天保六年（一部分）の合計十三カ所の作況記録には、一升当たりの重量が括弧書きで補筆されている。筆跡が表紙裏の注記や福米澤村の作況記録と同筆であるため、室井平藏氏（慶応元（一八六五）年、出生）が、粃の総重量を容積で除して、一升当たりの重量を補筆したとみられる。

文化九・十一・十二年、文政四・五・六・九・一〇・十一年、天保二・三・五・七・八・一〇・十一年、および天保六年の一部の十七年間に四七カ所で行われた内歩刈の記録には、総重量を欠いており、一升当たりの重量だけが記録されている。四七カ所における一升当たりの重量は、二四〇匁から三二〇匁までの間に分散している。しかし、その一桁目の数値は、四七カ所のすべてが五または〇であり、明らかに偏りがみられる（表1）。さらに、一升当たり

の重量は、三〇〇匁が八カ所、二九〇匁と二八〇匁が各七カ所、二八五匁が六カ所である。そのため、重量の計測精度は疑問である。また、文化十一年に内歩刈の対象となった三カ所すべてが二八五匁、天保一〇年は三カ所すべてが二九〇匁となっているため、両年に一升当たりの重量や総重量を実測したか疑わしい。

一方、粃の総重量と一升当たりの重量が共に記録されている六七カ所のうち、一升当たりの粃の重量の一桁目が〇であるものが三〇カ所、五であるものが十八カ所であり、明らかに偏りがみられる（表1）。六七カ所のうち、一升当たりの重量が総重量を容積で除した計算結果と一致するのは十四カ所、計算結果の小数点以下一桁を切り捨てているのが十四カ所、小数点以下一桁を切り上げているのが十二カ所である。他方、計算結果と一升当たりの重量が十匁以上異なるのが二カ所、五匁から十匁異なるのが四カ所確認できる。文化二（一八〇五）年には、計算結果と一升当たりの重量が十六匁も異なる事例もみられる。六七カ所に記録されている一升当たりの重量は、総重量を容積で除した数値と一致しない場合が多い。

表 1 粃1升当たりの重量

年代	一升当たりの重量別歩刈実施力所
享和元(1801)年～文化7(1810)年	248匁：1カ所、270匁：1、273匁：1、274匁：1、 275匁：1、278匁：2、279匁：1、280匁：4、282匁：1、 283匁：1、285匁：2、290匁：5、291匁：1、292匁：1、 295匁：1、300匁：4、304匁：1、309匁：2、記載なし：1
文化8(1811)年～文政3(1820)年	230匁：1カ所、245匁：2、253匁：1、255匁：2、 265匁：1、275匁：1、280匁：2、283匁：2、285匁：5、 290匁：1、293匁：1、295匁：2、300匁：4、305匁：1、 310匁：1、320匁：2、330匁：1
文政4(1821)年～天保元(1830)年	250匁：2カ所、265匁：1、270匁：1、271匁：1、 272匁：1、273匁：1、275匁：1、280匁：3、285匁：1、 287匁：2、290匁：2、295匁：1、300匁：7、305匁：1、 310匁：1、320匁：1、332匁：1
天保2(1831)年～天保11(1840)年	220匁：1カ所、227匁：1、231匁：1、240匁：2、 250匁：3、255匁：2、257匁：1、260匁：1、265匁：1、 270匁：1、272匁：1、274匁：1、275匁：2、277匁：1、 280匁：4、283匁：1、285匁：2、290匁：4、295匁：1、 300匁：3、305匁：1、310匁：1、320匁：2

史料) 奥会津博物館架蔵、「作毛位付帳」(室井家文書、4196)

粃の総重量の記録を欠く年が、享和元年から天保十一年に至る四〇年間の半数近くを占め、一升当たりの粃の重量の計測精度や計算結果にも問題がある。そのため、粃の総重量や一升当たりの重量ではなく、粃の容積で粃の作況を評価するのが妥当と判断できる。

四 粃の品種

享和元年から天保十一年までに内歩刈の対象となった粃の品種は、細葉、大こく(穀)、大石、大上石(極)、小上石、上石、上石惣左衛門毛なし、浄国、万石、石取、本明(名)、ふんこ(豊後)、白子、銀山かるこ、銀山、米沢かるこ、米沢、かるこ、今生白わせ、今生、伊南早稲、入小屋早稲、江戸早稲、江戸、早稲、惣左衛門毛なし、能右衛門、能固、すん尻である(表2)。品種名だけを根拠に品種の異同を判断するのは早計であるため、ここでは、前稿で検討した十八世紀後半の四二年間に内歩刈の対象となった八種類の品種名に対して、十九世紀前半に内歩刈の対象となった品種名が著しく増加したことを指摘するにとどめたい。

表2 内歩刈の対象となった稲の品種

年代	稲の品種別歩刈実施力所
享和元(1801)年～ 文化7(1810)年	細葉：8カ所、本明（名）：6、大上石（極）：4、大こく：2、上石：2、米沢かるこ：4、米沢：3、かるこ：1、石取：1、入小屋早稲：1
文化8(1811)年～ 文政3(1820)年	細葉：6カ所、大こく（穀）：7、大上石：4、大石：1、上石：1、小上石：2、本明：2、米沢：2、ふんこ（豊後）：3、惣左衛門毛なし：2
文政4(1821)年～ 天保元(1830)年	上石：7カ所、米沢：6、細葉：4、銀山かるこ：3、銀山：2、本名：2、かるこ：1、能右衛門：1、すん尻：1、白子：1
天保2(1831)年～ 天保11(1840)年	白子：7カ所、上石：5、浄国：1、上石惣左衛門毛なし：1、細葉：4、大石：3、万石：3、本名：3、銀山：3、江戸早稲：2、江戸：1、今生白己せ：1、今生：1、能固：1、伊南早稲：1、早稲：1

史料）奥会津博物館架蔵、「作毛位付帳」（室井家文書、4196）

内歩刈が行われた二二八カ所のうち、細葉は二二カ所（十七％）、上石が十五カ所（十二％）、本明（名）が十三カ所（一〇％）、米沢が十一カ所（九％）、大こく（穀）が九カ所（七％）、白子と大上石（極）が各八カ所（各六％）で栽培された。細葉と上石が、二二八カ所の水田で栽培されていた品種の二九％を占める。

十九世紀前半の「作毛位付帳」に頻出する細葉は、貞享元（一六八四）年に若松近郊に位置する會津郡幕内村の佐瀬与次右衛門が著した『會津農書』にみえる山間の集落に近い黄真土田、黒真土田、白真土田の水田に適する糯稲、豊後は中生早稲であった可能性がある（山田・飯沼・岡、一九八二・二四・二五頁）。大正三（一九一四）年に出版された『南會津郡誌』には、「本郡内二栽培セラル、水稻ノ品種」の早稲に萬石や輕子といった粳稲、中稲に豊後や大黒があがっており、金井沢が所属する檜澤村でも、大黒、輕子、豊後が栽培されていたことが確認できる（福島縣南會津郡役所、一九一四・二〇九頁）。

五 内歩刈の行われた時期

享和元（一八〇一）年から天保十一（一八四〇）年に至る四〇年間に内歩刈が行われた日は、9月19日から10月8日までである（表3）。およそ彼岸入りから彼岸明けに当たる9月19日から9月27日までに内歩刈が行われたのは二八年間であり、四〇年間の七〇％に相当する。金井沢村では、原則として彼岸中に内歩刈を行うことが、

慣例となっていたとみられる。

四〇年間で内歩刈の時期が最も遅れたのは、文化五（一八〇八）年である。農作業が遅れていたうえに9月末まで雨天が続いたために、10月8日に内歩刈が行われ、籾の容積、総重量共に四〇年間の中位であった。他方、四〇年間で最も早い時期に内歩刈が行われたのは、文化

表3 内歩刈の実施された時期

年代	歩刈実施月日（西暦）	別年数
享和元(1801)年～ 文化7(1810)年	9月19日：1年, 9月20日：2年, 9月23日：1年, 9月24日：1年, 9月26日：1年, 9月30日：1年, 10月1日：1年, 10月3日：1年, 10月5日：1年, 10月8日：1年	
文化8(1811)年～ 文政3(1820)年	9月22日：1年, 9月23日：1年, 9月24日：1年, 9月26日：3年, 9月27日：1年, 9月29日：1年, 10月2日：1年, 10月4日：1年	
文政4(1821)年～ 天保元(1830)年	9月20日：1年, 9月21日：2年, 9月23日：2年, 9月24日：1年, 9月27日：1年, 9月28日：2年, 9月30日：1年	
天保2(1831)年～ 天保11(1840)年	9月22日：1年, 9月23日：3年, 9月24日：1年, 9月25日：1年, 9月27日：1年, 9月29日：2年	

注）文化3年の内歩刈は2回行われた。天保6年の内歩刈には日付の記載がない。

史料）奥会津博物館架蔵、「作毛位付帳」（室井家文書、4196）

七（一八一〇）年である。彼岸二日前に当たる9月19日に実施され、籾の容積、総重量共に平年並みであった。

冷気のために農作業が遅れて例年通り歩刈できないという、文化五年と類似の特記が確認できる天保四（一八三三）と天保九（一八三八）年には、9月29日と9月23日に内歩刈が実施された。この三カ年のように、天候に応じて、内歩刈の実施日を調整した年もみられた。

平年作であった文化二（一八〇五）年の内歩刈は9月20日に、室井家の稲刈は10月6日から10月31日まで、断続的に行われた（「文化二乙丑年 農業耕作帳 正月吉日」、室井家文書、四二六五）。また、天保二（一八三一）年の内歩刈は9月25日に、室井家の稲刈は10月5日から10月27日まで行われた（「文政十四卯年、天保二年覚」、室井家文書、四二九五）。内歩刈から稲刈まで、およそ一〇日から一カ月程度の間隔があった。

六 内歩刈の対象となった水田

享和元（一八〇一）年から天保十一（一八四〇）年までの四〇年間で、内歩刈が一カ所で行われたのは一年、

表4 内歩刈の対象となった水田

年代	歩刈実施力所別年数
享和元(1801)年～ 文化7(1810)年	2カ所:1年, 3カ所:8年, 6カ所: 1年
文化8(1811)年～ 文政3(1820)年	2カ所:2年, 3カ所:7年, 5カ所: 1年
文政4(1821)年～ 天保元(1830)年	1カ所:1年, 2カ所:2年, 3カ所: 6年, 5カ所:1年
天保2(1831)年～ 天保11(1840)年	3カ所:6年, 4カ所:1年, 5カ所: 2年, 6カ所:1年

史料) 奥会津博物館架蔵、「作毛位付帳」(室井家文書、4196)

二カ所で行われたのは五年、三カ所で行われたのが二七年、四カ所で行われたのが一年、五カ所で行われたのが四年、六カ所で行われたのが二年である(表4)。四〇年間で最も不作であった天保四(一八三三)年には六カ所、天保六・七年や文政八(一八二五)年には五カ所、天保九(一八三八)年や文化一〇(一八一三)年には四

カ所で行われた。右にあげた不作の年には、例年より多くの水田で内歩刈が行われた。

享和三(一八〇三)年、文化二(一八〇五)・七・十一年、天保五(一八三四)・八・一〇・十一年には、上田、中田、下田の各一カ所ずつ、合計三カ所で行われた。文政二(一

八一九)・三・四年には、上、中、下三カ所の歩刈の結果が記録されている。この上、中、下は、上田、中田、下田と同義と考へたい。不作年を除いて、金井沢村では、上田、中田、下田の三カ所で行われたとみられる。

内歩刈の対象となった二二八カ所の水田が位置する小地名のうち、頻出するのは、段ノ上(檀ノ上を含む)が二三カ所(十八%)、柿下(柿ノ下を含む)が二二カ所(十七%)、段の下(檀ノ下、たんの下を含む)が十九カ所(十五%)、砂田が九カ所(七%)、はんは下(馬場下を含む)とまた下が各六カ所(各五%)、下タ村前が五カ所(四%)である(表5)。毎年数カ所で行われた内歩刈のうち、上田である可能性の高い各年次の冒頭に記録されている水田の小地名は、柿下(柿ノ下を含む)が十六年間、段ノ下(たんの下を含む)が十一年間である。内歩刈が行われた二二八カ所の地主(田主)のうち、頻出するのは、利右衛門と忠右衛門が各十一回(各九%)、佐太郎が一〇回(八%)、徳左衛門が九回(七%)である(表6)。対象となった水田の地名と地主(田主)が多様であるため、内歩刈の実施主体は金井沢村とみられる。

表5 内歩刈の対象となった水田の小地名

年代	小地名別歩刈実施力所
享和元(1801)年～ 文化7(1810)年	段ノ上(段乃上、段の上):7カ所、柿下:6、段乃下:3、はんば(ばんば、番場):3、はんば下:1、下タ村前:2、下タ村:1、下タ村向:1、砂田:1、となり田:1、とうの前長田ノ上:1、大道向:1、清兵田:1、小地名不掲載:3
文化8(1811)年～ 文政3(1820)年	段ノ下(たんの下、段の下):7カ所、段ノ上(段の上):6、柿下(柿ノ下):5、はんば下(馬場下):3、砂田:2、堰端:1、中沢前:1、下タ村前:1、間た下:1、家ノ前:1、久左衛門田:1、廣面:1
文政4(1821)年～ 天保元(1830)年	段ノ下(段の下):6カ所、柿下(柿ノ下):6、砂田:4、段ノ上(段の上):5、はんば下(馬場の下):2、また下:1、まゝの下:1、下タ村前(したむら前):2、堂ノ後:1
天保2(1831)年～ 天保11(1840)年	柿下:5カ所、段の上(檀ノ上):5、また下:4、段の下(檀ノ下):3、久左衛門田:3、関下:2、砂田:2、沢田:2、大道はた:2、杉下:1、窪田:1、宮ノ前:1、堂の前:1、帯沢:1、帯沢山下:1、堂の後帯沢:1、七十刈:1、家ノ下テ:1、ばんば家ノ下テ:1、

史料) 奥会津博物館架蔵、「作毛位付帳」(室井家文書、4196)

表6 内歩刈の対象となった水田の田主

年代	田主別歩刈実施力所
享和元(1801)年～ 文化7(1810)年	利右衛門:5カ所、佐太郎:5、加右衛門:4、市郎右衛門:4、助右衛門:3、彦蔵:2、忠右衛門:2、徳左衛門:2、治助:1、嘉右衛門:1、元左衛門:1、喜右衛門:1、宇平治:1
文化8(1811)年～ 文政3(1820)年	徳左衛門:6カ所、佐太郎:5、利右衛門:4、加右衛門:3、忠右衛門:2、嘉右衛門:2、治郎左衛門:1、忠助:1、半兵衛:1、新右衛門:1、徳右衛門:1、弥平治:1、助七:1、三治郎:1
文政4(1821)年～ 天保元(1830)年	山三郎:5カ所、藤左衛門:4、三治郎:3、利右衛門:2、忠助:2、仁右衛門:2、忠右衛門:1、徳左衛門:1、徳蔵:1、治七:1、市郎右衛門:1、藤助:1、又助:1、惣兵衛:1、林蔵:1、和右衛門:1
天保2(1831)年～ 天保11(1840)年	忠右衛門:6カ所、孫七:5、宗兵衛:5、喜左衛門:4、治七:3、利七:2、山三郎:1、清治郎:1、清治:1、庄三郎:1、忠一郎:1、平右衛門:1、理右衛門:1、忠助:1、清三郎:1、作兵衛:1、市兵衛:1、義左衛門:1、門兵衛:1

史料) 奥会津博物館架蔵、「作毛位付帳」(室井家文書、4196)

七 稲の作況

毎年数カ所で行われた内歩刈のうち、各年に収穫された粃の最大容積と最少容積を図1に示した。十九世紀前半の四〇年間に一二八カ所で記録された粃の収量が、一升未満となったのは二三カ所（十八％）、一升以上一升五合未満は六三カ所（四九％）、一升五合以上二升未満は三九カ所（三〇％）、二升以上は三カ所（二％）である。収量が二升以上となった年は、享和二（一八〇二）年、文化八（一八一―）年、文政五（一八二二）年の三年である。最も収量が多かった年は文政五年であり、品種名が米沢、粃の容積が二升二合七タ、株数が九九株である。これに次ぐのが文化八年であり、品種名が大きく、粃の容積が二升二合五タ、株数が八一株である。

収量が一升未満となった年は、文政八（一八二五）年、天保元・二・三・四・六・七・八・九（一八三八）年である。最も収量が少なかった年は、天保四（一八三三）年で、品種名が大石、粃の容積が三合五タ、株数が一〇六株である。これに次ぐのが、天保七（一八三六）年で、品種

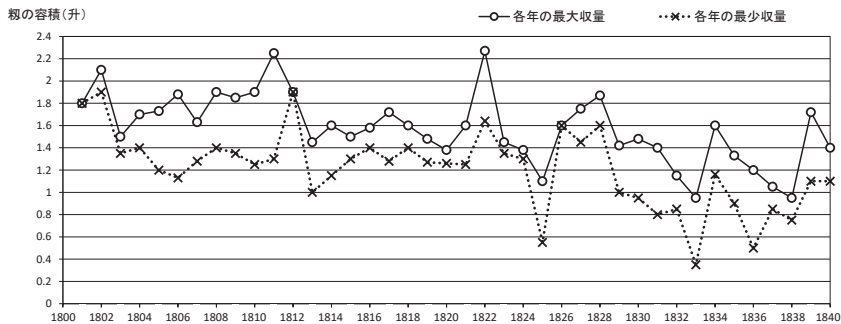


図1 陸奥国会津郡金井沢村における1歩の水田から収穫された粃の容積
(1801-1840)

史料) 奥会津博物館架蔵、「作毛位付帳」(室井家文書、4196)

注) 毎年1カ所から6カ所で行われた内歩刈の結果のうち、各年次における粃の最大収量と最少収量を表示した。

名が上石、粃の容積が五合、株数が一一三株である。天保四年には、會津藩から見分役人が派遣されて検見歩刈が行われ、一〇節で検討する史料四の「天保四巳年九月歩刈帳 會津郡金井沢村」（室井家文書、四二二五）が作成された。

『南會津郡誌』によれば、郡山町に立地する福島縣立農事試験場における品種名が豊後（中稲）の反当収量が二石二斗六升九合、輕子（中稲）の反当収量が二石四升九合である（福島縣南會津郡役所、一九一四・二一〇頁）。三〇〇歩を一反、粃摺りを五合摺りと仮定すると、一步の粃の収量は、豊後が一升五合一タ、輕子が一升三合七タと試算できる。先に三節で検討したように、明治九（一八七六）年以降の一步の面積を三・三〇六^m、明治九年以前の一步の面積を三・六四五^mと仮定して、大正期の反当収量を江戸時代の一步の粃の収量に換算すると、豊後が一升六合六タ、輕子が一升五合一タとなる。一方、「作毛位付帳」に記録されている豊後（ふんこ）の粃の収量は、文化十二（一八一五）年に一升三合（ふんこ）、文化十四（一八一七）年に一升三合八タ（ふんこ）、

こ）、文政二（一八一九）年に一升二合七タ（豊後）である。また、かるこの粃の収量は、文化四（一八〇七）年に一升六合三タ、不作であった文政八（一八二五）年に七合である。十八世紀中期以降の反当収量を追跡するには、稲の品種、一步の面積、枡の容積などを慎重に検討する必要がある。

八 「作毛位付帳」と「歩刈帳」に記された作況の差異

文政七（一八二四）年の作況は、「作毛位付帳」に記録された内歩刈の結果とつぎにあげる史料を比較することができ。

【史料三】「文政七年 歩刈帳 申八月 金井沢村」（室井家文書、四二二一）

文政七年 歩刈帳 申八月 金井沢村（表紙）
覚

金井沢村

字柿ノ下

地主

一、上田 一升 (付箋) 山三郎 印

但 稲草 上石

株 百五ツ

字馬場下 同

一、中田 九合 (付箋) 利右衛門 印

但 稲草 上石

株 九十七

字段の上 同

一、下田 七合 (付箋) 三治郎 印

但 稲草 細葉

株 百式十七

右者当作毛、村役人、田主立添内歩刈仕候。合付書面之通ニ御座候。以上。』

申八月 右村 組頭 市郎右衛門 印

同村 名主 室井忠右衛門 印

「作毛位付帳」の記録と史料三の「歩刈帳」を比較す

ると、上中下田の小地名、地主、稲の品種、および株数は一致する。他方、容積は、上田の内歩刈の結果が一升三合三夕であるのに対して「歩刈帳」では一升、中田の内歩刈が一升三合であるのに対して「歩刈帳」では九合、下田の内歩刈が一升三合八夕であるのに対して「歩刈帳」では七合である。「歩刈帳」に記録されている容積は、「作毛位付帳」に記録されている籾の容積の七五%（上田）、六九%（中田）、五一%（下田）である。両史料に記録されている容積の比が、上中下田で大きく異なるため、「歩刈帳」の容積は、籾を米に換算した数値ではない。名主、組頭、地主は、文政七年八月二十九日（一八二四年9月21日）の内歩刈で計測された籾の容積を下方修正した史料三の「歩刈帳」に押印して、その内容を確認している。

史料三と福米沢村、針生村、黒沢新田村、上塩沢村、高野村、および大豆渡村の「文政七年歩刈帳」（室井家文書、四二〇六から四二二二）は、「作毛位付帳」に合綴されている寛政十（一七九八）年の「歩刈帳」とほぼ同じ書式である。六カ村の「歩刈帳」には、史料三と同

様、「右者当作毛、村役人、田主立添内歩刈仕候。合付

書面之通二御座候」とあるため、下塩沢村を除く高野組の各村でも内歩刈が実施されていたことが確認できる。

前稿で検討したように、寛政六年九月十七日には、廻村中の代官が高野村で休憩した際、高野組八カ村の「位付帳」に記録した稲の作況を一冊にまとめて差出した（川口、二〇二一A）。史料三と六カ村の史料は、代官に差出す「歩刈帳」の下書と推測される。

籾の容積は、七カ村とも付箋に書かれており、付箋の下には何も書かれていない。福米沢村の「上田

十升四合九合五夕（付箋）地主 孫市」（室井家文書、

四二〇六）のように、福米沢村、針生村、上塩沢村における籾の容積は、付箋上で下方修正されている。文政七（一八二四）年に高野組の七カ村が作成した「歩刈帳」は、触継名主である室井忠右衛門のもとに、各村の内歩刈の結果を持ち寄り、籾の収量を談合して下方修正した後、代官に差出していた可能性を示唆する史料である。代官が村から差出された「歩刈帳」から知ることのできた籾の収量は、内歩刈の実測結果より相当少なかったとみら

れる。

九 畑作物の作況

十九世紀前半の四〇年間のうち、畑作物の作況が記録されているのは、享和元（一八〇一）年から文化六（一八〇九）年、文化一〇・十一年、および天保七（一八三六）年の十二年間である（表7）。煙草、麻、大豆、小豆、蕎麦、粟、稗、芋、菜大根の作況が、上、中、下、下々の四段階で判定されている年が多い。

畑作物の作況が最もよかったのは文化四（一八〇七）年で、大豆、小豆、蕎麦、芋、菜大根が上と判定されている。文化六・一〇年は四種類の作物が上、享和元年、文化五・十一年は三種類の作物が上と判定されている。

他方、畑作物の作況が最も悪かったのは、享和二（一八〇二）年であり、麻、大豆、小豆、蕎麦、粟、稗が下と判定されている。文化五・六・一〇年は四種類の作物が下と判定されている。

表7 陸奥国会津郡金井沢村における畑作物の作況（1801-1840）

西暦	和暦	煙草	麻	大豆	小豆	蕎麦	芋	粟	稗	菜大根
1801	享和元	下	中	中	中	中	下	上	上	上
1802	享和2	中	下	下	下	下	中	下	下	上
1803	享和3	上	中	中	中	中	上	中	中	上
1804	文化元	下	中	下	中	中	上	中	中	中
1805	文化2	下	下	中	中	中	下	中	中	中
1806	文化3	中	下	下	中	中	中	中	中	上
1807	文化4	中	下	上	下	上	中	下	下	上
1808	文化5	上	上	中	下	下	中	下	下	上
1809	文化6	下	下	上	上	中	下	上	上	菜：下、 大根：中
1810	文化7	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載
1812	文化9	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載
1813	文化10	上	上	上	上	下	下	上	下	不掲載
1814	文化11	中	中	中	中	下	上	上	中	不掲載
1815	文化12	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載
1835	天保6	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載
1836	天保7	下	不掲載	上	上	不掲載	不掲載	中	不掲載	下
1837	天保8	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載
1840	天保11	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載	不掲載

史料）奥会津博物館架蔵、「作毛位付帳」（室井家文書、4196）

一〇 天保四年の天候推移と作況

本節では、「天保四年正月吉日 農業覚日記」（以下では「農業覚日記」と略称する。室井家文書、四二九七）に記録された毎日の天気と農作業、金井沢村における凶作の推移を記した「天保四年金井沢村名主凶作状況書留」（以下では「凶作状況書留」と略称する。田島町史編纂委員会、一九八七・五九・六三頁）、および金井沢村の北東約三〇kmに位置する会津盆地南西端の大沼郡高田組高田村に住む高田組郷頭田中重好が記した「救荒小語」（会津美里町教育委員会架蔵、田中文庫）を併用して、金井沢村における粃の収量が、十九世紀前半で最低を記録した天保四（一八三三）年の田植から稲刈に至る天候推移と作況を追跡する。「救荒小語」による天候推移は、伊東実の論文を参考とした（伊東、一九八六）。

一八三三年6月に降雨が記録されているのは、金井沢村で六日間（天気不記載6月13・26日）、高田村で十二日間である。「農業覚日記」から確認できる6月7日から9日までの降雨を梅雨入りと考えたい（表8）。「救荒小

表8 天保4（1833）年の陸奥国会津郡金井沢村における天気

月日 (西暦)	天気	月日 (西暦)	天気	月日 (西暦)	天気	月日 (西暦)	天気	月日 (西暦)	天気
6月1日	日和	7月1日	日和	8月1日	寒空	9月1日	日和	10月1日	日和
6月2日	日和	7月2日	日和	8月2日	雨	9月2日	小雨	10月2日	日和
6月3日	日和	7月3日	日和	8月3日	小雨	9月3日	上日和	10月3日	日和
6月4日	日和	7月4日	日和	8月4日	日和	9月4日	日和 夜雨	10月4日	曇天
6月5日	日和	7月5日	日和	8月5日	日和	9月5日	小雨	10月5日	日和
6月6日	日和	7月6日	日和	8月6日	日和	9月6日	日和	10月6日	日和
6月7日	小雨	7月7日	日和	8月7日	日和	9月7日	上日和	10月7日	雨
6月8日	小雨	7月8日	日和	8月8日	日和	9月8日	日和	10月8日	日和
6月9日	雨	7月9日	雨	8月9日	小雨	9月9日	日和	10月9日	日和
6月10日	日和	7月10日	日和	8月10日	小雨	9月10日	日和	10月10日	日和
6月11日	日和	7月11日	日和	8月11日	日和	9月11日	日和	10月11日	日和
6月12日	日和雨	7月12日	日和	8月12日	雨	9月12日	上日和	10月12日	日和
6月13日		7月13日	小雨	8月13日	日和	9月13日	日和	10月13日	小雨
6月14日		7月14日	日和	8月14日	日和	9月14日	雨天風	10月14日	日和
6月15日		7月15日	雨天	8月15日	日和	9月15日	日和	10月15日	日和
6月16日		7月16日	日和	8月16日	日和	9月16日	日和	10月16日	日和
6月17日		7月17日	日和	8月17日	小雨	9月17日	日和	10月17日	雲
6月18日		7月18日	日和	8月18日	小雨	9月18日	雨天	10月18日	日和
6月19日		7月19日	日和	8月19日	日和	9月19日	日和	10月19日	日和
6月20日		7月20日	日和	8月20日	曇空	9月20日	日和	10月20日	小雨
6月21日		7月21日	日和	8月21日	小雨	9月21日	日和	10月21日	日和
6月22日		7月22日	上日和	8月22日	上日和	9月22日	日和	10月22日	日和
6月23日		7月23日	雨天	8月23日	日和	9月23日	日和	10月23日	日和
6月24日		7月24日	日和	8月24日	日和	9月24日	日和	10月24日	日和
6月25日		7月25日	日和	8月25日	日和	9月25日	日和	10月25日	日和
6月26日		7月26日	雨	8月26日	小雨	9月26日	雨	10月26日	日和
6月27日	雨	7月27日	日和	8月27日	雨天	9月27日	日和	10月27日	日和
6月28日	小雨	7月28日	日和	8月28日	上日和 夕立	9月28日	日和	10月28日	日和
6月29日	日和	7月29日	雨	8月29日	日和 夕立	9月29日	日和	10月29日	日和寒
6月30日	日和	7月30日	日和	8月30日	日和	9月30日	雨天	10月30日	上日和
		7月31日	日和	8月31日	朝雨 日和			10月31日	日和

史料）奥会津博物館架蔵、「天保四年正月吉日 農業覚日記」（室井家文書、4297）

語」には、6月9日に「昨夜ヨリ大雨降続ク入梅」と記されている。高田村では6月6日から田植が始まり、金井沢村では6月18日から26日まで田植が行われた。

「救荒小語」には、「五月七日（6月24日）、日々風吹。九日（26日）寒クシテ綿入ヲ衣」とある。高田村で体感された「風」は、オホーツク海高気圧から本州北部太平洋側に吹き出した寒冷な北東気流とみられる。高田村では、6月27日に飯豊山の冠雪が観察されて、田中重好は、6月26日から30日まで冬着である綿入を着用した。

7月に降雨が記録されているのは、金井沢村で六日間（表8）、高田村で十七日間である。「救荒小語」に記録されている7月18日から21日まで続いた連日の雷と19日の宮川の洪水は梅雨末期の集中豪雨を、7月27日の「伊佐須美ニテ力蟬鳴」という記事は梅雨明けを思わせる。しかし、高田村では、31日以降も降雨と異常低温が続き、梅雨明けが不明瞭となった。「救荒小語」には、7月2・10・28・30・31日に「冷氣」、3・27日に「冷」と記されており、28日に飯豊山の冠雪が観察されている。重好は7月10日に綿入を、1・3・31日に袷を着用している。

8月の降雨日数は、金井沢村で十三日間（表8）、高田村で二六日間である。「農業寛日記」には8月1日に「寒空」、「凶作状況書留」には1日に「寒空」、2・3日に「雨さむし」、「救荒小語」には5・7・10日に「冷氣」、6日に「冷」と記されている。重好は8月10日に袷を着用した。「救荒小語」の「同十二日（8月26日）ヨリ廿三日（9月6日）迄昼夜ノ内必大小ノ雨降ラサル日ナク、偶々廿四日（7日）ヨリ廿六日（9日）迄終日晴レトモ冷氣甚シクシテ、米價日々ニ貴シ」という表現は、8月末から9月上旬の長雨と異常低温を端的に示している。

9月に降雨が記録されているのは、金井沢村で七日間（表8）、高田村で二二日間である。「救荒小語」には9月7・8・16・17・19・20・24日に「冷」、18日に「冷氣」と記されている。重好は9月18・24日に綿入を着た。

10月に降雨が記録されているのは、金井沢村で三日間（表8）、高田村で一〇日間である。「救荒小語」には10月7・8日に「寒」、14日に「甚寒」、18日に「冷氣」と記されている。「救荒小語」の「同廿三日（10月6日）ヨリ廿八日（11日）迄朝夕大小冷氣ナラサルハナク、

廿五日（10月8日）水霜降ル。」という記事は、10月上旬の異常低温を端的に示している。金井沢村では、検見歩刈が行われた10月16日の翌17日から30日まで稲刈が行われた。高田村では、10月28日に稲刈が始まった。

「凶作状況書留」には、「同十三日（8月27日）少々はしり穂相見申候、七月十九日（9月2日）二百十日半分出穂仕候」と記されており、金井沢村では稲の生育の遅延が顕著となった。そのため、9月21日に高野組各村の名主が寄合を開き、田島代官所へ「凶作之御披露書」を差出して破面検見を願ひ出た（田島町史編纂委員会、一九八八・三三二頁）。

「作毛位付帳」には、「土用中^二雨天冷氣^三一統節後^二相成、彼岸中^二歩刈難相成、彼岸明^三キ三日め^二いたし候^一と記されている。例年、彼岸中に行われていた内歩刈が、7月末からの長雨と異常低温のために、稲の生育が遅れて実施できず、彼岸明け三日目の9月29日に延期された。内歩刈の結果に、金井沢村では大騒ぎとなった。

會津藩は、見分役人を派遣して、10月16日に金井沢村で検見を実施した。検見歩刈の結果をつぎに示す。

【史料四】「天保四年 歩刈帳 已九月 会津郡金井沢村」（室井家文書、四二二五）

天保四年

歩刈帳

已九月 会津郡金井沢村」（表紙）

陸奥国會津郡金井沢村

字柿下

田主

一、上田 式反式拾式歩

喜左衛門

御改 五合 下見 式合五夕

但 稲草 大石

株 百式拾九株

字川原ノ前 田主

一、下田 四畝七歩 平兵衛

御改 四合 下見 壹合五夕

但 稲草 白子

株 百八株

右者去辰^ル方来^ル戊^ル迄七ヶ年定免之内、当田方青立不作二付、御検見入奉願、田毎明細御案内仕、御見分之上、私

共田方御歩刈被』仰付候所、書面之通合毛相違無御座候。
仍之連印御受奉差上候。以上。

田主

天保四年

喜左衛門

印

巳九月

同断

平兵衛

印

百姓代

嘉兵衛

印

組頭

傳兵衛

印

名主

室井忠一郎

印

南山御蔵入領では、天保三（一八三二）辰年から天保九（一八三八）戌年まで七年間の定免期間中であつたが、會津藩から派遣された検見役人である横山重兵衛の見分の下で、名主、組頭、百姓代、田主が立ち会い、10月16日に検見歩刈が実施された。史料四には、上田の御改が五合、下田の御改が四合と記されている。検見歩刈の結果、十八世紀中期以降で天明三（一七八三）年に次ぐ未

表9 天保4（1833）年の陸奥国会津郡金井沢村における水田の作況

1歩当たりの 粃の査定収量	本田	新田など	合計
4合毛	3反3畝		3反3畝
3合5夕毛	1反7畝10歩	6畝	2反3畝10歩
3合毛	3反5畝26歩	1反	4反5畝26歩
2合5夕毛	9反8畝23歩	2反1畝	1町1反9畝23歩
2合毛	1町1反13歩	1町6畝	2町1反6畝13歩
1合5夕毛	2町9反16歩	1反6畝	3町6畝16歩
1合毛	3町7反4畝22歩	1町3反2畝	5町6畝22歩
5夕毛	2町7反3畝22歩	5反5畝	3町2反8畝22歩
皆無	7町16歩	2町5畝14歩	9町6畝
合計	19町3反4畝28歩	5町5反1畝14歩	24町8反6畝12歩

史料）奥会津博物館架蔵、「天保四年巳八月 當田方青立不作二付 内見合附帳 會津郡金井沢村」（室井家文書、4224）

曾有の凶作が確定した。
検見歩刈に先立ち、名主、組頭、百姓代、老百姓が立ち会い、10月2日から7日に内見が行われた。その結果

を記録した「天保四年巳八月 當田方青立不作二付 内見合附帳 會津郡金井沢村」(室井家文書、四二二四)

には、柿下二三番の喜左衛門が持つ上田二反二二歩が二合五夕毛、川原ノ前十八番の平兵衛が持つ下田一反が一合五夕毛と記録されている。史料四の「下見」は、金井沢村の全水田における一步当たりの粃の収量を一筆ごとに査定した内見の結果であり、実測結果ではないため、検見歩刈より少なく査定されている。金井沢村における内見の結果を集計した表9によれば、検見歩刈の対象となった喜左衛門と平兵衛の水田は、比較的作況のよい水田から選ばれていたことが確認できる。天保四年に金井沢村で作付けされた二四町八反余の水田のうち九町余、約三六%が皆無作と査定された。

会津地方は、6月中旬から10月中旬まで続いた長雨、異常低温、および日照不足にみまわれた。田植直後から稲刈直前まで、断続的に異常低温が記録されている。そのため、天保四年の冷害は、稲の分けつ期に生育が遅れ減収となる遅延型冷害と生殖成長期に低温のため不稔となる障害型冷害が重複した複合型冷害に分類できる。

小結

本稿では、陸奥国会津郡金井沢村名主を世襲した室井家が保存してきた「作毛位付帳」のうち、享和元年(一八〇二)年から天保十一(一八四〇)年に至る四〇年間を紹介した。本史料は、一〇〇年以上にわたり、一步の水田数カ所から刈り取った粃の収量を計測した内歩刈の記録である。内歩刈を行っていたのは、金井沢村だけではなく、高野組の各村でも実施されていた。

金井沢村では、宝暦期から9月下旬の彼岸に内歩刈を行う慣例となっていた。内歩刈は、毎年一カ所から六カ所の水田で実施され、三カ所で行われた年が過半数を占める。内歩刈の対象となった水田の小地名と田主が多様であるため、内歩刈の実施主体は金井沢村とみられる。

四〇年間に内歩刈の対象となった一二八カ所の水田で栽培された稲の品種名は、十八世紀後半の四二年間と比較して著しく増加した。多様な品種のうちで、細葉と上石が一二八カ所の二九%を占める。細葉は、山間の集落に近い真土田に適する糯稻とみられる。

「作毛位付帳」には、籾の容積、総重量、一升当たりの重量、および株数などが記録されている。総重量の記録を欠く年が多く、一升当たりの重量が総重量を容積で除した数値と異なる場合が多い。そのため、籾の重量ではなく、籾の容積で稲の作況を評価するのが妥当である。

文政七（一八二四）年に廻村中の代官に差出した可能性のある「歩刈帳」の下書に記されている籾の容積は、「作毛位付帳」に記録されている籾の容積の五割から七割に下方修正されている。そのため、高野組の各村から差出された「歩刈帳」により、代官が知ることのできた籾の収量も、内歩刈の結果より相当少なかった可能性が高い。

金井沢村では、天保四（一八三三）年に、籾の収量が十九世紀前半で最低を記録した。会津地方は、6月中旬から10月中旬まで続いた長雨、異常低温、および日照不足にみまわれた。そのため、天保四年の冷害は、遅延型冷害と障害型冷害が重複した複合型冷害に分類できる。

十八世紀中期から二〇世紀初頭に至る籾の収量を追跡するには、引き続き、一步の面積、枡の容積、および稲の品種の理解に努めることが重要である。今後、日本文

化史研究、五四号に明治六（一八七三）年から大正五（一九一六）年までの史料を翻刻・検討する計画である。

謝辞 筆者は、平成三〇年三月、南会津町立奥会津博物館から、「作毛位付帳」をはじめ、室井家文書の写真撮影を許された。会津美里町教育委員会には、「救荒小語」はじめ、田中文庫の複写版の写真撮影を許された。小澤弘道先生には、会津地方における一聞の長さについて御教示いただいた。会津若松市立会津図書館には、所蔵史料について御教示いただいた。翻刻にあたり、東昇先生、鈴木明子先生に御教示いただいた。各位のご厚情に深謝したい。本稿は、令和三年度から六年度の科学研究費補助金・基盤研究（B）、研究代表者・川口 洋、課題番号・二一H〇三七七六を用いた研究成果の一部である。

注

- （1）旧福島県では、地租改正の基礎資料となる耕宅地を含む字地の字限野取図は、明治九年に完成した（安田、一九八六・二九頁）。六尺を一問とする測量が実施されて、字限野取図や丈量帳が、金井沢村の所属する若松県でも、この時期に完成していたとすれば、明治九年に六尺を一問とする「改正新竿」を用いて内歩刈が行われたという「作毛位付帳」の記録とも整合する。

参考文献

- ・会津若松史出版委員会（一九六七）『会津若松史 第9巻 資料編Ⅱ』会津若松市。
- ・アチック・ミュージアム（一九三九）『星家所蔵種子帳・稲刈帳・新潟県北魚沼郡湯之谷村・アチック・ミュージアム彙報、第三八。
- ・伊東 実（一九八六）『天保の飢饉について』『歴史春秋』第二三号、一二・一二三頁。
- ・伊南村史編さん室（二〇一一）『伊南村史 第一巻 通史編』南会津町。
- ・奥会津博物館編（二〇一八）『平成30年度 奥会津博物館企画展報告書 奥会津の豪商 細井家の300年 歴代当主10人の生き方と事績をたどる』南会津町教育委員会。
- ・川口 洋（二〇二一A）『十八世紀中期から二〇世紀初頭の陸奥国会津郡金井沢村における稲の作況記録 上 室井家文書「作毛位付帳」（宝暦九年から寛政十二年まで）』『日本文化史研究、第五二号、一五三・二〇五頁。
- ・川口 洋（二〇二二B）『天明期の冷害に伴う人口変動』井上孝・和田光平編著『自然災害と人口』原書房。
- ・岸 英次（一九四七）『関谷家稲刈覚帳の研究…一農家における文化七年以降の水田生産力の變遷（農業綜合研究所研究叢書第一号）』農林省農業綜合研究所。
- ・鬼頭 宏（二〇〇六）『坪刈帳 気候変動資料としての活用をめぐる』地球環境字、二、一一五・一二八頁。
- ・佐藤常雄（一九八七）『日本稲作の展開と構造』吉川弘文館。
- ・田島町史編纂委員会（一九八七）『田島町史 第六巻（上） 歴史春秋社
- ・田島町史編纂委員会（一九八八）『田島町史 第二巻』歴史春秋社。
- ・糠澤章雄（一九九七）『南奥における太閤検地と江戸前期の検地』福島史学研究、第六四号、一・三一頁。
- ・福島県（一九六五）『福島県史 第9巻 資料編4、近世資料2』。
- ・福島縣南會津郡役所（一九一四）『南會津郡誌』明文堂。
- ・三島町史編纂委員会（一九六八）『三島町史』三島町史出版委員会。
- ・南会津町教育委員会（二〇一〇）『奥会津博物館収蔵資料目録 第1集 室井哲之輔家寄贈文書』。
- ・安田初雄（一九八六）『仙道及び会津における一里塚に関する諸問題』福島大学教育学部論集、四〇号（社会科学部門）、一九・三五頁。
- ・山田龍雄・飯沼二郎・岡 光夫編（一九八二）『日本農書全集十九 会津農書 会津農書附録』農山漁村文化協会。
- ・若松市役所（一九四一／一九八七）『若松市史 上巻』国書刊行会。

陸奥國會津郡金井沢村、室井家文書「作毛位付帳」(享和元年から天保十一年まで) 翻刻

凡例

・原文の表記は、原則として、漢字は常用漢字を、仮名は通行の字体を用いた。ただし、常用漢字以外の文字、「江」、「ゑ」、「而」、「者」、「お」、「め」は、原文どおりにした。

・丁替えは、「」で示した。

・読解の便を考慮して、句読点を付した。

翻刻

天保十一年 下組 孫三郎所

九月二日 彼岸明キ翌

上田 久左衛門田

一、白子 壺升三合 忠右衛門

但 百壺株

壺升目 三百五匁

中田 大道はた

一、早稲 壺升四合 宗兵衛

但 九拾五株

壺升 貳百五十五匁

下田 檀ノ上

一、細葉 壺升壹合 孫七

但 百貳拾壺株

壺升 貳百六十五匁

天保十亥年 上組 丹右衛門所

八月十五日 彼岸二日め

江戸早稲 久左衛門田 田主

一、上田 壺升七合貳匁 忠右衛門

但 百拾六株

壺升目 二百九拾匁

伊南早稲 大道はた

一、中田 壺升三合五匁 宗兵衛

但 百五株

壺升 貳百九拾匁

浄国 檀の下

一、下田 壹升壹合 門兵衛

但 百貳拾壹株

壹升 貳百九拾匁』

天保九戌年 内歩刈

稲草 今生 株 九拾六 地主

一、上田 九合五夕 忠右衛門

杉下 此匁 貳百六拾匁

壹升 二百七拾四匁

江戸早稲 百拾株 砂田

一、中田 九合 利七

此匁 貳百四拾五匁

壹升 貳百七拾貳匁

白子 百貳拾六 関下

一、下田 七合五夕 義左衛門

此匁 貳百四拾匁

壹升 三百貳拾匁

ノ

上石 株 百三 関下

一、中田 八合 市兵衛

此匁 貳百貳拾匁

壹升 貳百七拾七匁』

当年之義、土用以前^ノ

不氣候、冷氣^ニ節後^ニ

相成、例年之通歩刈難

相成、八月五日致候。尤

上中田共^ニ中割取吟味

之上歩刈試ス。

尤彼岸八月二日^ニ候。』

天保八酉 八月廿四日 彼岸中日

内歩刈 上組 太右衛門所

柿下 上田

一、白子 壹升五夕 喜左衛門

百拾株 壹升 三百貳拾匁

また下 中田

一、万石 壹升 宗兵衛

九十三 壹升 貳百八十匁

檀ノ下 下田

一、江戸 八合五夕 忠右衛門

七十八 皆匁 貳百五拾匁』

上田 壺升五夕

反取 三石壺斗五升

此米 壺石五斗七升五合

中田 壺升

反取 三石

此米 壺石五斗

下田 八合五夕

反取 貳石五斗五升

此米 壺石貳斗七升五合

平均 壺石四斗五升』

天保七年申 八月十九日

内歩刈 宿 下組 清吉

宮ノ前

一、大石 壺升貳合 作兵衛

百拾三株 壺升 貳百五拾匁

砂田

一、上石 五合 利七

百拾八 〃 三百匁

久左衛門田 七合五夕 忠右衛門

一、白子 〃 貳百八拾匁

百拾壺

家ノ下テ 壺升 宗兵衛

一、能固 〃 貳百四十匁

帶沢 八合 治七

一、白子 〃 貳百八拾匁』

菜大根 下

栗 中

大豆 上

小豆 上

煙草 下

蕎麦』

天保六未年 宿 上組 兵右衛門

内歩刈

八十八株

堂の前

一、今生

壺升

忠右衛門

白己せ

此 匁 三百匁

百六株

沢田

一、上石

九合

清三郎

此 匁 貳百五十五匁 (壺升二付 貳百八十三匁)

百四株

ばんば家ノ下テ

一、銀山

壺升三合三夕

宗兵衛

壺升

貳百七拾五匁

九十五

窪田

一、上石 壺升目合五夕 忠助

惣左衛門毛なし

壺升 貳百七十五匁

百三十壺

堂の後帯沢

一、細葉

壺升

治七

此 匁

貳百五十五匁』

天保五年午 八月廿二日

彼岸中日

忠助所

内歩刈

柿下上田

一、万石

壺升六合

喜左衛門

百拾七株

壺升

貳百九拾五匁

また下中田

一、銀山

壺升貳合三夕

理右衛門

百三十株

壺升

貳百八拾五匁

段の上下田

一、細葉 壹升壹合六夕 孫七

百三株

壹升 貳百八十五匁』

天保四年巳 八月十六日 上組 嘉兵衛所

内歩刈

柿下上田

一、大石 六合五夕

喜左衛門

百拾四株

惣目 百五拾匁

壹升 貳百三拾壹匁

段の上下田

一、細葉 五合

孫七

百株

惣目 百三拾匁

壹升 貳百六拾匁

段の下上田

一、万石 九合五夕

平右衛門

九十三株

惣目 貳百三拾匁

壹升 貳百四拾匁

七十刈

一、白子 七合

忠一郎

百九株

惣目 百八拾匁

壹升 貳百五拾七匁

沢田上田

一、大石 三合五夕

庄三郎

百六株

惣目 八拾匁

壹升 貳百貳拾匁』

帶沢山下

一、銀山 八合五夕

新田 治七

百拾貳株

惣目 百九拾匁

壹升 貳百廿七匁

一、土用中^三雨天冷氣^二一統節後^二相成、彼岸中^二

歩刈難相成、彼岸明キ三日めいたし候。』

彼岸中日 下組 佐右衛門所

天保三辰 八月廿九日

七拾貳株 柿下

一、上石 壹升壹合五夕 喜左衛門

壹升 貳百九拾匁

九十壹株 また下

一、白子 壹升 清治

壹升 三百貳拾匁

九十貳株 段の上

一、本名 八合五夕 孫七

壹升 貳百七拾匁』

彼岸入五日目

天保二年卯 八月廿日

上組 清兵衛所

百拾四株 柿下

一、本名 壹升四合 山三郎

壹升 三百匁

八十三株 また下

一、上石 九合五夕 清治郎

壹升目 貳百八拾匁

八十株 段の上

一、本名 八合 孫七

壹升 貳百五十匁』

彼岸明キ明日

天保元寅 八月十二日 下組 庄三郎所

内歩刈

百六株 柿下

一、白子 壹升四合八夕 山三郎

此匁 四百五拾匁

壹升 三百五匁

また下

百拾貳株 壹升八夕 和右衛門

此匁 三百二拾五匁

壹升 三百匁

百六株

段の上

一、本名

九合五夕

林蔵

此匁

三百拾五匁

壹升

三百三拾貳匁』

彼岸中日明日

文政十二丑

八月廿七日

上組 藤助所

内歩刈

百六株

段の下

一、銀山

壹升壹合七夕

仁右衛門

此匁

三百四拾五匁

壹升

貳百九拾五匁

百拾五

ま、の下

一、能右衛門

壹升四合貳夕

惣兵衛

此匁

四百五匁

壹升

貳百八拾匁

百十五

段の上

一、本名

壹升

又助

此匁

三百匁』

彼岸中日

文政十一子 八月十五日

武右衛門所

内歩刈

百壹株

柿下

一、銀山

壹升六合

山三郎

壹升二付

貳百六拾五匁

百五かぶ

砂田

一、米沢

壹升八合七夕

藤左衛門

壹升_二付

貳百七拾五匁』

彼岸明キ日

文政十亥

八月七日

藤助所

内歩刈

百貳かぶ

段ノ下

一、銀山かるこ

壹升四合五夕

仁右衛門

壹升_二付

貳百八十五匁

九拾五

砂田

一、上石

壹升七合

藤左衛門

壹升_二付

三百廿匁

百六かふ

柿下

一、銀山かるこ 壺升七合五夕 藤助

壺升^二付 二百九拾匁^一』

彼岸壺日前

文政九戌 八月十九日 山三郎所

内歩刈

七十五

柿下

一、銀山かるこ 壺升六合 山三郎

壺升目 貳百九拾匁^一』

彼岸明二日目

文政八酉 八月十六日 佐三郎所

内歩刈

百三

下夕村前

一、米沢 壺升壺合 市郎右衛門

壺升 貳百五拾匁

惣目 貳百七十六匁

百拾

柿下

一、上石 八合 山三郎

惣目 貳百三拾匁 (壺升 二百八十七匁)

九十五 砂田

一、上石 五合五夕 藤左衛門

目方 百五拾匁 (壺升 二百七十二匁)

百拾壺 堂ノ後

一、細葉 八合 治七

目方 貳百三拾匁 (壺升 二百八十七匁)

百 段の下

一、かるこ 七合 徳藏

目方 百九拾匁 (壺升 二百七十一匁^一』

彼岸入二日目

文政七申 八月廿九日 治右衛門所

内歩刈

百五かふ 柿ノ下

一、上石 壺升三合三夕 山三郎

壺升 貳百七十三匁

惣目 三百六拾三匁

九十七かふ 馬場の下

一、上石 壺升三合 利右衛門

壺升 貳百七拾匁

惣目 三百五十匁

百廿七かふ 段ノ上

一、細葉 壺升三合八夕 三治郎

壺升 二百五十匁

惣目 三百四十五匁』

彼岸入三日目

文政六未 八月十九日 助七所

内歩刈

百三かふ 段ノ上

一、細葉 壺升三合五夕 三治郎

壺升 三百拾匁

九拾五 段ノ下

一、すん尻 壺升四合五夕 徳左衛門

壺升 三百匁

八十五 したむら前

一、米沢 壺升三合五夕 忠右衛門

壺升 三百匁』

彼岸明三日 九右衛門所

文政五年 八月十六日

内歩刈

百五かふ 段ノ下

一、細葉 壺升六合四夕 忠助

壺升 三百匁

九拾九かふ 砂田

一、米沢 壺升貳合七夕 藤左衛門

壺升 貳百八拾匁』

文政四巳 八月廿五日 助七所

内歩刈

百三かふ 段ノ下

一、上 米沢 壺升六合 忠助

壺升 二百八拾匁

七拾六かふ はんは下

一、中 上石 壺升貳合七夕 利右衛門

壹升 三百匁

百廿三かふ

段の上

一、下 米沢 壹升貳合五夕

三治郎

壹升 三百匁』

文政三辰 八月廿日 彼岸終

宿 新右衛門所

百貳拾貳株

柿下

一、上 壹升三合八夕

嘉右衛門

壹升^二付 二百八拾三匁

稲草 大上石

✂ 三百九拾壹匁

八拾三株

馬場下

一、中 壹升三合四夕

利右衛門

壹升^二付 三百匁

稲草 惣左衛門毛なし

✂ 四百三匁

百四株

段の上

一、下 壹升貳合六夕

三治郎

壹升^二付 三百匁

稲草 細葉

✂ 三百七拾八匁』

文政二卯 八月九日 彼岸終

宿 徳左衛門所

上 百九株

柿ノ下

一、壹升貳合七夕

嘉右衛門

壹升^二 三百三拾匁

豊後

惣目 四百廿匁

中 七拾九株

間た下

一、壹升三合四夕

利右衛門

壹升^二 二百八十匁

惣左衛門毛なし

惣目 三百七拾五匁

下 百拾六株

段ノ上

一、壹升四合八夕

佐太郎

壹升^二付 三百匁

稲草 細葉

惣 四百四拾五匁』

文政元寅 八月廿二日 彼岸二日目

内歩莉

忠左衛門所

百十かふ 段の上

一、細葉 壺升^二四合 佐太郎

壺升^二付 貳百九拾五匁 〆 四百拾五匁

百三かふ 柿ノ下

一、大石 壺升^二六合 加右衛門

壺升^二付 二百六拾五匁 〆 四百廿五匁』

八月十六日 彼岸明

文化十四丑 内歩莉 勘右衛門所

八拾五かふ 砂田

一、ふんこ 壺升^二三合八夕 助七

壺升^二付 三百五匁 〆 四百二拾匁

九十六かふ 段の上

一、米沢 壺升^二貳合八夕 佐太郎

壺升^二付 二百八十五匁 〆 三百六拾五匁

百二かふ 段の下

一、大こく 壺升^二七合貳夕 徳左衛門

壺升^二付 二百七拾五匁 〆 四百七拾五匁』

忠右衛門風邪ニ付延

閏八月八日 彼岸明三日目

文化十三子年 内歩莉 惣左衛門所

たんの下

一、小上石 壺升^二四合 徳左衛門

九拾三 目方 四百三拾五匁

壺升 三百拾匁

下夕村前

一、大こく 壺升^二五合八夕 忠右衛門

百三 目方 四百五拾匁

壺升 貳百八拾五匁

中沢前

一、大上石 壺升^二五合 弥平治

百十貳 目方 四百四拾匁

壺升 貳百九拾五匁』

八月廿四日 彼岸六日目

文化十二 内歩莉 佐太郎所

段ノ下 八十五かふ

一、大穀 壹升三合五夕 徳左衛門

壹升^二付 貳百九拾匁

堰端 九十三かふ

一、小上石 壹升五合 利右衛門

壹升 三百廿匁

砂田 九十六かふ

一、ふんこ 壹升三合 徳右衛門

壹升 三百廿匁』

八月十一日 彼岸中日

文化十一戌年 内歩菰 惣十所

柿下 百九かふ

一、上田 壹升貳合 加右衛門

大穀 壹升^二付目方 貳百八拾五匁

はんは下 百かふ

一、中田 壹升六合 利右衛門

細葉 壹升^二付 貳百八拾五匁

段ノ上 百五かふ

一、下田 壹升壹合五夕 佐太郎

本明 壹升^二付 貳百八拾五匁

ノ

畑方

一、たはこ 中

一、麻 上

一、粟 上

一、稗 中

一、大豆 中

一、小豆 中

一、いも 上

一、蕎麦 下

一、菜大根

ノ

文化十酉 九月十一日 彼岸明八日目

内歩菰 平兵衛所

段ノ下 地主

一、大こく 壹升四合五夕 徳左衛門

八十式かふ 壹升 貳百四十五匁

目方 三百五拾壹匁

柿下

地主

一、同

壹升

加右衛門

九十三株

目方 貳百三拾匁

馬場下

地主

一、大上石

壹升四夕

新右衛門

百一かふ

壹升

貳百五十五匁

目方 貳百六拾五匁

段ノ上

地主

一、本明

壹升壹合

佐太郎

九十九株

壹升

々

目方 貳百八十五匁

廣面

地主

一、細葉

壹升

半兵衛

百廿四かふ

目方 貳百四十五匁』

畑方

一、たはこ 上

一、麻 中

一、粟 下

一、稗 下

一、大豆 上

一、小豆 上

一、いも 下

一、菜大根 上

一、蕎麦 下』

八月十八日

文化九 内歩刈

段ノ下

一、上石 壹升九合

徳左衛門

壹升 三百匁

百八かふ

同所

一、細葉 壹升九合

忠助

壹升 貳百八十匁 九十五かふ』

八月十五日 彼岸明五日目

文化八 内歩刈 仲右衛門所

段ノ下 八十疋かふ

一、大こく 式升二合五夕 徳左衛門

壹升 式百五十三匁 惣目 五百九十三匁

久左衛門田 百二かふ

一、米沢 壹升八合五夕 忠右衛門

壹升 式百八拾三匁 惣目 五百三拾匁

家ノ前 百七かふ

一、大上石 壹升三合 治郎左衛門

壹升 式百九拾三匁 惣目 三百八十六匁

田方平均 上』

文化七午年 八月廿一日 彼岸二日前

歩刈 佐兵衛所

段ノ下

一、上田 壹升九合 徳左衛門

石取 株 九十一

五百十匁 一升 式百七十匁

はんは下

一、中田 壹升六合五夕 利右衛門

細葉 株 百疋

目方 四百六拾五匁 一升 式百八十匁

段ノ上

一、下田 壹升式合五夕 宇平治

入小屋早稲 株 百三拾式

惣目方 三百六拾五匁 一升 式百九十二匁』

八月十七日 彼岸明

文化六巳年 内歩刈

九十六かふ 清兵田

一、米沢 壹升三合五夕 忠右衛門

壹升 式百九拾五匁

惣目 四百匁

九十二かふ 大道向

一、細葉 壹升八合 利右衛門

壹升 式百八拾五匁

惣目 五百拾五匁

百三かふ 段ノ下

一、上石

壺升八合五夕 徳左衛門

壺升 貳百八十五匁

惣匁 五百三拾匁

ノ

平均田方 上

畑方 中

たはこ 下

麻 下

大豆 上

小豆 上

粟 上

稗 上

蕎麦 中

芋 下

菜 下

大根 中

ノ

文化五辰 八月十九日

幸右衛門所

内歩莉

但当年作方時節後^二

相成、彼岸中歩莉難相成。

尤八月十日迄毎日雨天^二付

相延申候。彼岸入候八月朔日

^二有之候。十七日^二天氣能

相成申候。

百かふ

一、米沢

壺升七合

忠右衛門

惣目

三百拾匁

(二升^二付 二百八十二匁)

字 とうの前長田ノ上

九十式かふ

一、細葉

壺升九合

市郎右衛門

惣目

五百貳拾匁

(二升^二付 二百七十四匁)

字 下夕村前

九十四かふ

一、上石

壺升四合

加右衛門

惣目

三百九拾匁

(二升^二付 二百七十九匁)

字 砂田

田作平均 下

畑作平均 中ノ上』

一、多葉こ 上

一、麻 上

一、大豆 中

一、小豆 下

一、粟 下

一、稗 下

一、蕎麦 下

一、芋 中

一、菜大根 上

ノ

卯九月二日 彼岸明六日目

文化四 歩莉 元左衛門所

段ノ上

一、かるこ 壺升六合三夕 彦蔵

百廿一 目方 四百五拾匁

壺升 貳百七拾五匁

柿下

一、大上石 壺升五合七夕 喜右衛門

百七 目方 四百五拾五匁

壺升 貳百九拾匁

段ノ上

一、本明 壺升貳合八夕 佐太郎

百九 目方 三百八拾五匁

壺升 三百匁

畑作

一、たはこ 中

一、麻 下

一、大豆 上

一、小豆 上』

一、蕎麦 上

一、粟 下

一、稗 下

一、いも 上

一、菜大根 上

ノ

百六かふ

元左衛門

一、大上石

壺升七合七夕

目方 五百拾五匁 (一升 二百九十一匁)

百七かふ

本名

一、米沢

壺升八合八夕 助右衛門

五百四拾五匁 (一升 二百九十匁)

一、下田 壺升壺合三夕 佐太郎
百拾六かふ

百十五かふ

三百四拾八匁 壺升 三百九匁

一、細は

壺升八合壺夕 市郎右衛門

畑作

五百廿五匁 (一升 二百九十匁)

一、煙草こ 中

寅八月廿四日

(両度ノ歩刈ナラン。寅年二通アリ。)

寅 八月廿日

文化三

内歩刈

吉兵衛所

大上石

段乃下

一、上田

壺升六合壺夕 彦藏

一、いも 中

一、稗 中

一、粟 中

一、蕎麦 中

一、小豆 下

一、大豆 下

一、あさ 中

細葉

一、中田

壺升三合壺夕 利右衛門

百四かふ

四百三匁 壺升 三百九匁

段乃上

九拾三かふ

四百八拾八匁 壺升 三百四匁

番場

一、菜大根 上

ノ

文化二丑 八月廿八日

内歩菰 庄右衛門所

大上極 柿下

一、上田 壺升七合三夕 嘉右衛門

百四かふ

五百廿匁 壺升 三百匁

細ば ばんば

一、中田 壺升六合 利右衛門

九十かふ

四百九十匁 壺升 貳百九十匁

本名 段の上

一、下田 壺升貳合 佐太郎

百三かふ

三百六十匁 壺升 三百匁

畑作

一、たはこ 下

一、あさ 下

一、大豆 中

一、小豆 中

一、蕎麦 中

一、粟 中

一、稗 中

一、いも 下々

一、菜大根 中

ノ

文化元子 八月廿七日

内歩菰 加右衛門所

米沢かるこ 柿下

一、上田 壺升五合 加右衛門

八十五かふ

四百廿匁 壺升 貳百八拾匁

々 段ノ上

一、下田 壺升四合 佐太郎

百三かふ

四百匁 壺升 貳百八十匁

細は

下夕村向

柿下

一、上

壺升七合

市郎右衛門

一、上田

壺升五合

加右衛門

九十五かふ

四百四拾匁

一升 貳百九拾匁

四百五十匁

米沢かるこ

畑作

はんば

一、たはこ 下

一、中田

壺升三合五夕 利右衛門

一、麻 中

八十八かふ

一、大豆 下々

三百九十五匁 一升 三百匁

一、小豆 中

本明

一、蕎麦 中

段ノ上

一、粟 中

壺升三合五夕 佐太郎

一、稗 中

百六かふ

一、いも 上

三百八十五匁 一升 貳百八拾匁

一、菜大根 中

本明

ノ

畑作

一、多はこ 上

八月九日

甚助代仁兵衛所

享和三

内歩刈

彼岸中日

一、麻 中

一、大豆 中

一、小豆 中
 一、蕎麦 下
 一、粟 中
 一、稗 中
 一、いも 上
 一、菜大根 上

八月廿四日 彼岸中日
 享和二戌 歩刈 下組 弥左衛門所
 となり田

一、本明 壺升九合 市郎右衛門
 五百廿匁 百拾八

下夕村前 壺升^二付 貳百七十三匁
 一、米沢かるこ 貳升壺合 助右衛門
 五百九十九匁 百十六

柿下 壺升^二付 貳百八十三匁

一、大こく 壺升九合 治助

四百七十六匁 百四かふ
 壺升^二付 貳百四十八匁

刈方

多はこ 中 麻 下

大豆 下 小豆 下

蕎麦 下 粟 下

稗 下 いも 中

菜大根 上

八月十六日 惣助所

享和元酉 内歩刈

八十六かふ 柿下

一、大こく 壺升八合 加右衛門

惣目方 五百匁 (一升 二百七十八匁)

九十壺かふ 下夕村

一、細葉 壺升八合 助右衛門

惣目方 五百匁 (々)

菜大根	稗	蕎麦	大豆	多葉こ	畑方
上	上	中	中	下	

いも	栗	小豆	麻
下	上	中	中